

Falling down 落  
ミイラク 墜

1

空。

光。

私は、生まれた。

青い。

白い。

漂っていた。

高い。

広い。

周りには、何も無かった。

太陽だけが、輝いていた。

2

私は、旅を始めた。

山を越え、

海を越え、

世界を巡った。

そして、あなたと出会った。

すぐに、恋をした。

「はじめまして」

「はじめまして」

「あの…」

「なに？」

「私と…」

「なに？」

「いえ、なんでもありません」

「へんなの」

「いや、えっと…」

「ああ、あなた、はじめて？」

「え？」

「まだ、したことがない？」

「ええ、実は」

「恥ずかしがらなくていいよ、誰だって、最初はそうなんだから」

「ええ、ありがとう」

「でも、ちゃんと言ってくれないと、嫌だな」

「あの、あなたと…」

「私と？」

「一緒になりたい」

「いいよ、一緒になろう」

その瞬間、

お互いを隔てていた何かが消失し、

私とあなたは、溶け合い、ひとつになった。

3

こうして、私は大人になった。

みんな、大人になった。

出会い、

別れ、

また出会い、

怒り、

笑い、

知り、

失い、

ぶつかり、

離れ、

跳び、

集い、

また、集い。

そうして、社会が生まれた。

誰かが言った。

「綺麗なものは、最初だけ」

「どんどん余計なものが増えて行って、汚れていく」

「そんな余計なもので、身も心も重くなって」

「そして最後には落ちるんだ」

「高いところにいられるのは、限られたやつだけさ」

「生存競争だ」

「それが、社会ってやつさ」

「それが、大人ってやつさ」

「それでも私たちは、ずっと一緒だよ」

そう言ったのは、あなただったのか、私だったのか。

私たちの社会。

不安定で、

流動的で、

遠くから見ると綺麗なのに、

中に入ると、まるで混沌。

風に流され、

あっちでもない、

こっちでもない、

どこに向かっているのか。

何をしようとしているのか。

けれど、

そこに必死にしがみついていなければ、落ちてしまう。

そうやって、どいつもこいつもしがみついた結果が、

この重い、

暗い、

汚い、

社会。

みんな、最初は綺麗だったはずなのに。

誰もが、汚れてしまう。

私も、あなたも、ここでは汚れてしまう。

だから私たちは、自ら落ちることを選んだ。

誰にも別れを告げることもなく、

私たちは、そこから飛び降りた。



6

落下。

重力。

加速。

高かった。

まだ、地面は遠い。

いままで、私がいた場所を見上げる。

灰色。

暗かった。

汚かった。

そんな社会に別れを告げ。

さらに落下。

さらに重力。

さらに加速。

この世の底が、近づいた。

私の中のあなたか、

あなたの中の私が言った。

「もし生まれ変わったら、また綺麗な私になれるかな」

「そしたら、また私と一緒にしてくれる？」

「約束だよ」

「またね」

激突。

衝撃。

弾け。

別れ。

散り。

消え。

「きゃっ」

パート先から帰宅途中だった彼女は、小さな悲鳴をあげた。

突然、頬に、何かが当たったからだ。

頬に触れる。

一滴の水だった。

見上げると、どんよりと暗い雨雲が、空を覆っていた。

さわやかな風がいくら押しても、全く微動だにしない、鈍重な雲。

必死に空にしがみついているような、大きな、低い雲。

しがみつくことで、より重く、より低くなっているというのに。

自分だけは落ちたくないという、太陽を覆うほど深い、利己的な欲望。

それに耐え切れずに、落ちてきたのだ、きっと。

頬にもう一度触れる。

しかし、そんな空想は、現実的な問題によって、一瞬で立ち消えた。

「いけない、洗濯物干しっぱなしだわ」

彼女は、駆け足で家に向かった。

8

土砂降りの翌日。

雲ひとつない空。

朝日が濡れた地面を照りつける。

私は熱を帯び、空高く昇って行く。

そして、再び、私は綺麗な粒子となり、

あなたを見つけ、

また、一緒に溶け合いたい。

**END**